

C1-4

遠隔教育者を支える同価値理論と交流距離理論

Equivalent Value Theory and Transactional Distance Theory
to support Distance Educators

鈴木 克明

Katsuaki SUZUKI

熊本大学

Kumamoto University

要約：本発表では、サイモンソンが提唱する同価値理論とムーアが提唱する交流距離理論を取り上げ、遠隔教育に携わる者がそれらの理論をどう活用して自らの教育実践構築に生かす可能性があるかを論じた。その際、筆者がこれまでに経験してきた通信制高等学校における放送教育や、内外の遠隔大学・大学院の設計・運営を省察した。

キーワード： 同価値理論、交流距離理論、高校講座、通信制高校、遠隔大学

1. はじめに

通信教育から遠隔教育、そしてオンライン教育と変遷を遂げる中、メディアを教育に利用した形態を利点とするための研究が行われてきた。本稿では、その成り立ちや歴史的経緯からみると、対面教育よりは劣る「孤独な学習」(佐藤・井上, 2008) と自らを位置づけがちな遠隔教育者を支援する理論を探してたどり着いた二つを紹介する。

2. サイモンソンの同価値理論

サイモンソンは、遠隔教育を支えてきた3つの理論（自主自律理論・産業化理論・双方向コミュニケーション理論）に加えて、第4の「同価値理論」を提唱した（鈴木, 2000）。通信技術の発達などによって、擬似的な遠隔教育環境（バーチャル教室など）が可能になってきている現在、何が遠隔教育で何がそうでないかを区別しようとするよりも、遠隔・通学を問わずすべての教育経験に「同等の価値」を持たせることに主眼を置くべきだと主張した。

それぞれが置かれた環境によって、学習経験は様々な様相を呈するであろうが、全体として同価値になるように環境をデザインすべきだと言う。ここで、同じにすることを目指すという意味は、「同型」ではなく「同価値」であり、たとえ教師と学習者が同じ場所と時間を共有しなくとも、お互いの意思疎通を図ることは可能だとする。遠隔教育を教室と同じ形にすることを目指さないことを強調している。

教室の議論では消極的な学習者が、掲示板での議論であれば積極的に参加するという事例が報告されている。教室で働いている社会的関係性を示すキーが掲示板では介在しないこと、あるいは、熟考型の参加者でも掲示板に発言する前に内容を吟味・推敲できるが、教室では即時性が求められること、などがその要因として指摘されている。直接対面型の教育がいつでも誰にもベストであるということではないことを、この事例が物語っている。

対面教室で教える教師が掲示板の利点をうまく活用して授業外の活動を設計するブレンド型方法を採用すると、遠隔教育の教師は対面教室での活動がない分不利になる。しかし、遠隔教育でありがちな、面教室に伝統的に採用してきた教育方法を疑似的に実現しようとする努力は、方法を同じにする行為であって、そこから算出される学習成果（すなわち価値）を同じにしようとする試みではない。遠隔教育の設計では、これまでの教室での伝統・常識を改めて見直し（たとえば講義は止めて指定図書を読ませる）、より効果的な教育方法の組み合わせを模索することが可能なのである。

南太平洋大学（フィジー国）の遠隔教育支援センターでこの理論を紹介したら、聴衆から歓迎された。どうしても二流意識・劣等感を持つてしまう遠隔学習者を相手に、どうしたら通学生と同じ価値の学習経験を提供できるか。この投げかけが功を奏したのか、フィジーからの招聘は4回を数えている（Suzuki & Nemoto, 2011）。

3. ムーアの交流距離理論

遠隔教育の研究者として広く知られるペンシルバニア州立大学教授のマイケル・ムーアは、1970年代に交流距離理論（Transaction Distance Theory）を提唱した（ムーア他, 2004; 鄭ほか, 2006）。ムーアは、遠隔教育を、単に学習者と教師が地理的に離れているということではなく、より重要なのは、教師と学習者の関係性の世界を示す教育学的な概念である、と主張し、学習者と教師の距離を地理的距離でなく心理的距離で理論化した（図1）。

心理的距離は、対話と構造の二次元で描かれ、学習者の自律性の高低によって適する度合いがそれぞれ異なることがモデル化されている。すなわち、遠隔教育にあっても（あるいは対面教育でも）、自律性が低い学習者には教師からの励ましやタイムリーなアドバイスなどの「対話」が豊富に用意されている必要があり、また学習要求もしっかり構造化されているのが望ましい。一方で、徐々に学習者の自律性が養われていけば、選択の自由が許容され

（構造化が低い）、求めない限りはアドバイスが与えられない（対話が低い）ような学習環境が心理的に適していることが読み取れる。

交流距離理論を用いて、様々なタイプの遠隔教育と対面講義などの教育形態を比較した研究では、自律性・対話・構造・協調面の得点を比較すると、必

ずしも遠隔教育において心理的距離が遠いとは限らないことを示している（Bray, 2007）。学期が終わるころになって単位を懇願しに研究室を訪ねてくる学生が教員の顔を知らずに「A先生を目の前にして「A先生はどちらにいらっしゃいますか」と聞く、という逸話が語られる。対面教育でも心理的距離が（この例では物理的距離も）近いとは限らないことが経験的にも示されていると言えよう。

交流距離理論の話を2009年の全国通信制高校研究会で披露した際には、これもまた歓迎された。高い自律性が求められる通信制高校に入学してくる高校生は、様々な学習歴を経ており、実際は対話と構造が最も求められるような生徒が多い。それを逆手に取れば、徐々に支援をフェードアウトしていくように通信制高校のカリキュラム全体を設計することで、自律性を高める契機となるというメッセージが伝わったのだろうと思う。

4. おわりに

通信制高校との付き合いを省察してまとめた際の結論は、「通信制の良いところを取り入れることで、通学制の学校でも主体的な学びが成立するのではないか」ということであった（鈴木 2000）。通学制でも取り入れてもらえるような教育手法を遠隔教育で試み、その良さを今後も主張していきたい。

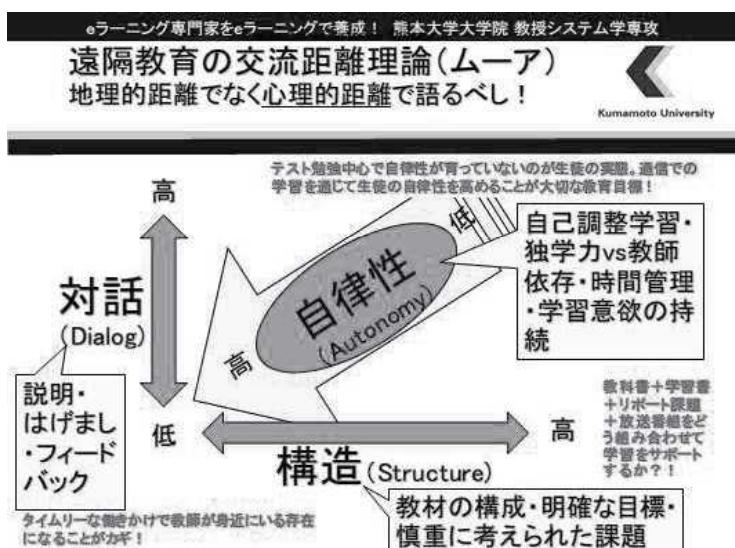


図1 交流距離理論による対話・構造・自律性の関係

（第61回全通研滋賀大会放送分科会資料）

参考文献

- 佐藤卓己・井上義和（編著）（2008）『ラーニング・アロン—通信教育のメディア学』新曜社
- Bray, E. (2007). The distance learner: Variables of interest. 四日市大学環境情報論集 10 (1 / 2) 35-48.
- 鄭仁星・久保田賢一（編著）（2006）『遠隔教育とeラーニング』北大路書房
- 鈴木克明（2000）「通信制高校にとっての放送教育」から学んだこと『放送教育』54(9), 49-53.
- Suzuki, K. & Nemoto, J. (August, 2011) A Framework for Institutional Design for e-Learning Promotion: A case of the University of South Pacific. A paper presented at ICoME 2011, Korea. (Proceedings, p.52)